

■研究報告

# 自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理

小林 隆児

*Japanese Journal of Psychiatric Treatment*

Vol.8, No.3, Mar. 1993

*Published*

*by*

*Seiwa Shoten, Co., Ltd.*

---

精神科治療学

第8巻第3号 1993年3月 別刷

星和書店刊

---

## ■研究報告

## 自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理

小林 隆 児\*

抄録：高機能自閉症で好ましい適応状態にあった青年期の1女性にみられた「相貌的知覚」現象を提示し、発達精神病理学的観点から検討した。「相貌的知覚」(Werner)は幼児のような自他の未分化な原始的心性が支配的な状態で現出しやすい現象である。良好な言語発達を遂げた自閉症者にいまだこのような知覚現象が色濃く残存していることは、自閉症の自他の未分化性を示す知見として、自閉症の基本障害を考える上で重要な問題を提起していると考えられた。ただ、外界への現実志向性は一貫して保たれ、思春期心性が「相貌的知覚」現象の中に如実に反映されていた。今回明らかになった自他の未分化性はけっして彼女の自我全体の破局をもたらしてはいないことから、彼女の自我構造は重層的に考える必要性が示唆された。その理論的準拠枠として Stern の自己感の発達理論の有用性を示した。

自閉症の知覚異常は以前から指摘され、自閉症の生物学的次元での基本障害とみなされているが、神経生理学、神経心理学、精神病理学などの様々な次元で明らかになりつつある知見の相互連関性を考える上でも、今回明らかにされた「相貌的知覚」は大きなヒントを与える可能性を秘めていることを強調した。 **精神科治療学 8(3); 305-313, 1993**

**Key words:** *autism, developmental psychopathology, intersubjectivity, physiognomic perception, sense of self*

## I. はじめに

自閉症に知覚面の異常がみられることは成人した自閉症者の過去の回想によって、その存在と内容がかなり明らかになり<sup>2,5,22)</sup>、今日では自閉症の基本障害として生物学的立場からも非常に重視されるようになった<sup>3,4,16,17)</sup>。自閉症の知覚の特性を明らかにしていく作業は、神経生理学的研究<sup>17)</sup>、

神経病理学的研究<sup>4)</sup>の他、実験心理学<sup>6)</sup>や行動科学的接近<sup>15)</sup>などの手法によって活発に展開され、自閉症にみられる様々な知覚面の異常の存在が明らかにされてきた。

自閉症の知覚様式の特性の解明は、人間が環境世界をどのように捉え、それを個体が社会的枠組みの中でどのように位置づけ、行動の判断の拠り所としているかを考える際の最も重要な鍵を握る側面である。ただ自閉症における他者知覚あるいは対象知覚の問題が、今日まで行われてきた先の膨大な諸研究に共通して用いられてきた主-客認識図式に合致する知覚様式の枠内での議論で、はたして解明されていくのであろうか<sup>14)</sup>。行動科学的接近方法の重視、他者の行動の客観的記述、実験心理学的デザインといったいわゆる「客観性」を重視したこれらの研究の手法が、自閉症の人間

1992年11月24日受理

Physiognomic perception in autism and its developmental psychopathology.

•大分大学教育学部

(〒870-11 大分県大分市大字旦野原700)

Ryuji Kobayashi, M.D.: Faculty of Education, Oita University, 700, Dannoharu, Oita-shi, Oita, 870-11 Japan.

存在そのもののあり方を探る上で最も有効な手段たりうるのであろうか。

自閉症研究に際して行われてきた多くの実験デザインでは、自閉症の知覚特性をいわゆる健常者の知覚特性と同質のものであることを基本的了解事項として組み立てられ、実験の成績結果が健常者のそれよりどの程度歪み、遅れているかを明らかにしていく手続きが一貫して行われてきた。知覚現象そのものが極めて間主観的事象である<sup>14)</sup>にもかかわらず、そこでは自閉症児一人一人が様々な生活経験を背負ってきた一個体存在であることではないがしろにされ、その過程で彼らの人間存在そのもののあり方はほとんど捨象されてきた。

自閉症の中核的症状である「自閉性 Autismus」はこの数十年間、言語認知障害の結果もたらされた二次的症状であるとみなされ、真正面から「自閉性」そのものに迫ろうとする研究はほとんど省みられることなく経過してきた。しかし、「自閉性」は今日でもなお国際診断基準<sup>1,24)</sup>の中で一つの柱として重視されていることには違いない。「自閉性」とは、はたしてどのような内実を含んでいるのであろうか。「自閉性」が我々の前で最も現実に突きつけられるのは、このような子どもに我々が直接対峙した時であるのは至極当然のことではあるが、このことは「自閉性」の実態そのものがそもそも極めて間主観的な事象<sup>7,21)</sup>であって、主体ないし客体どちらか一方のみで生起し自己完結するような事象ではありえないことを示している。先述した様々な実験研究はこうした間主観的事象を捉えることを極力排することによって一見極めて客観的と思える知見を数多くもたらしてきた。つまりそこでは間主観的事象である「自閉性」は非客観的な事象として一切捨象されてきたのである。自閉症における知覚現象を考える際にも同様な問題が孕まれていると考えなくてはならない。

以上のような理由から筆者は、自閉症の知覚様式の実態そのものに肉薄していくためには、自閉症児一人一人が一個の主体的存在であることを基本的了解事項として捉えることがこのほか重要であると考えようになった。そこで筆者は自閉症の知覚様式の特徴が生活の中にどのような形で体现されているかを検討することにした。

本論の主題は、以上のような観点から自閉症児の生活総体の中で見出された、彼らに特徴的な知覚様式の一つと思われる「相貌的知覚」について論じることにある。

## II. 症例提示

症例 礼子(仮名) 現在20歳 就労中  
知的水準 境界域精神遅滞 WISC-R TIQ  
80 (VIQ 84, PIQ 79)

胎生期、周産期異常なく、満期正常分娩。生下時体重3,150g。乳児期、あやしても反応が乏しかった。人見知りもなく、言葉も遅れ、母に甘えることも少なかった。幼児期、多動が目立った。特に赤ん坊の声を嫌がっていた。2歳の時、他児の泣き声を嫌がり、突然叩きかかることがあった。3歳の時から積木の文字を見て覚え始めた。4歳、幼稚園入園。集団行動をとることは困難であった。家では茶ダンスの中から洋酒のビンを取り出して並べるのを楽しんだり、絵や漢字をふすまに落書きするのに没頭していた。病院に行くと、他人が乱雑に脱ぎ捨てている靴を、母の制止も振り切ってきたように並べ替えていた。5歳の時には、車のクラクションの音を嫌がり、その車に近寄ってバンパーを叩いたりすることもあった。金槌の音も嫌いで、金槌をみると放り投げるためしばらく家の金槌は隠すほどであった。

小学校普通学級に入学。書字は左利き。漢字をどんどん覚えるようになり、級友から「漢字博士」との異名を頂戴するまでになった。漢和辞典を引いて漢字を調べるのを日々の習慣としていた。小学校後半になると、母親への依頼心がそだってきた。母はそれを積極的に受け入れるようになって礼子の甘えはこの頃から急速に強まっていった。

5年時、現在地に転居。当時、学級担任が児童相談所に来所した際の相談内容をみると、気分のむらが激しく、授業中もよく離席し、些細な怪我や痛みにも異常なほどの恐怖心を示し、執拗に尋ねていた。登校拒否傾向もみられ、特に級友に粗暴な行動を示していた。低学年の子どもに執拗にスキンシップを求めるなど、周囲の人への異常なほどの接近欲を見せていた。漢字はとにかく詳しい

が、算数能力は極端に低かった。この時は特殊教育の必要性を考慮するように助言がなされただけであった。

家族や本人の希望もあって中学校も普通学級に入学したが、1年時は落ちつかず授業もほとんど受けられないほどであった。中学3年時の知能検査で、鈴木・ピネ式 IQ 66, SM 社会生活能力テストで SQ 73。この頃から自分は自閉症で他児のようには何でもできないという自己意識が芽生えていた。髪の毛の臭いを盛んに嗅ぐといった習癖も残っていた。

中学卒業後、自宅近くの洋裁専門学校に通うようになった。この頃から友だちを大切にしはじめ、以前に比べると情緒も安定し、女の子らしい身なりに関心を示すようになった。バス通学も一人でするなど自立心も育ちつつあった。洋裁技術の習得にも懸命に取り組んでいた。

しかし、学校でその場に不釣り合いな行動をするために周囲の人から傷つくことを言われるようになり、まわりの評価に敏感になっていった。ついに実習用のミシンを数台壊すという事態が起きた。ミシンの音が気に入らないから壊したと教師や親にその理由を説明していたが、壊すミシンは古くなったものだけに限られていた。礼子は壊すとすっきりするからだというのだった。担任が級友の前で礼子のことを自閉症だから理解して接するようにと説明したことから、「礼子そんなにブス?」「どうせ頭が悪いから」「礼子は自閉症?」



図1 「九」君と「州」君

「どうせ自閉症だからな」「どうせ障害児だからな」と言うなど、自己意識が高まり、どんどんエスカレートしパニック状態を呈するようになった。pimozide 1~2 mg/日投与で、比較的速やかに鎮静化を図ることができた。

実はこの頃から、礼子のもともとの漢字への強い興味が異性への関心と相まって、「九州電力」の文字をととも気に入り、その収集に没頭するようになっていた。「九」君と「州」君の二人を空想上の人物として作り上げ(図1)、彼らと自室で語り合ったり、新聞の中の「九州」の文字を切り抜き、それを大切に持って枕の下に入れて寝たり、朝起きると『「九」君、『州』君おはよう』と挨拶をするほどになった。「九」君はスポーツ万能でバスケットボール部。〇〇高校の生徒会長。「州」君もスポーツができて頭がよい、と二人の人物像まで描くようになり、両家の家系図(図2)をも作成するのだった。さらには、「九州」の漢字の太さ、形態によってこの「九」君と「州」君は、「怒っている」、「泣いている」、「笑っている」と漢字の表情が字体によって各々異なると表現するまでになった(図3)。しかし、学校では「九」君と「州」君のことは言わないように担任から注意されて以来、その約束を礼子は守り、現実性は保たれていることがうかがわれた。

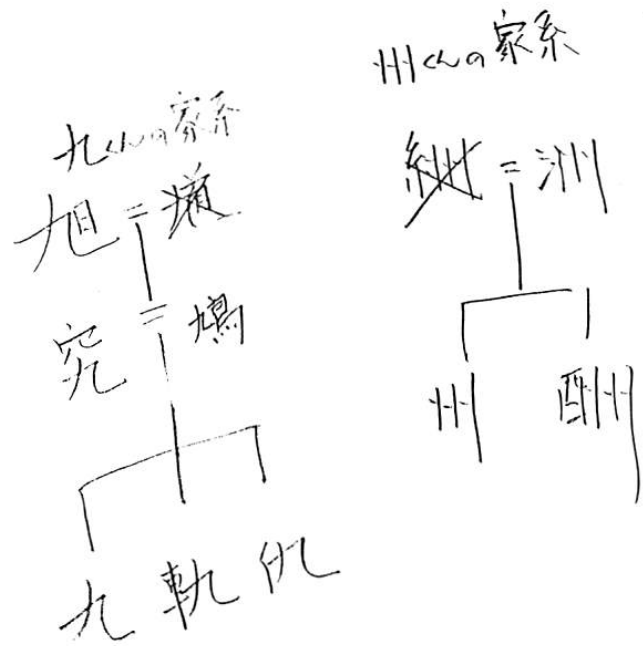


図2 「九」君と「州」君の家系図

九州

・・・笑っている「九」君と「州」君

九州

・・・泣いている「九」君と「州」君

州

・・・怒っている 「州」君

図3 様々な表情をもつ「九」君と「州」君

しかし、友だちからオカルトを題材とした本を借りて一人で読んでみると、タンスに悪魔の顔が写っていると言って怖がり、タンスを捨ててと母に真顔で訴えるというエピソードが出現することもあった。母が説得するとどうにか数分でおさまっていた。

母はこの子が小学校高学年から次第に甘えてきたため、以来夫と離れて礼子と一緒に寝るようになった。それが現在まで続いてきたが、この頃になって、いろんな習い事をしたいと盛んに要求するようになった。今までどうして習わせてくれなかったかと母に問い詰める場面さえみられるようになった。またその一方では、寝る前になると、以前修学旅行で行った長崎の絵はがきをいつも枕の下に置いて寝ている。鳥、人形、その他の玩具、以前使っていた算盤、以前使っていた自分の持ち物を次々に枕元に置いて寝るようになった。筆者がそろそろ母子別々に寝るようにと助言すると、漢字への没頭の度合いはより激しさを増してきた。特に寝る前になるとそれが目立った。礼子が好意を抱く「州」君のことは母には全くの秘密事であることもこの頃判明した。

高校3年の夏、外が騒がしいと言って窓を閉めて厚い布団を頭から被ったりするようになった。特に犬の声や近所の車の音を極端に嫌っていた。車のクラクションの音もひどく嫌がり、その車のところに出掛けてあわやなぐりかからんとするまでになってきた。礼子の苦悩を面接の中でじっくりと聞き入ることで、どうにかこの危機的事態は回避することができた。

面接の中で筆者が興味深げに礼子の「九」君と「州」君の様子を聞き入ったためであろうか、JR九州の「州」君は意地悪そう、九州石油の「州」君

は怒っている、九州電力の「州」君は笑っていて優しいなどと、礼子は漢字への思いに熱弁を振るうようになった。「『州』君と結婚したい。『州』君にバレンタインデーのチョコを贈りたい。でも『州』君とはうまくゆかないという気がする。私わがままだから。治らない。三つ子の魂百までというから、性格は治らん」とまで自分の内面を吐露するのだった。ある日、診察室に入って主治医に会うなり、「九州電力」の文字カードを手にとって「この紋所が目に入らぬか！」(テレビドラマ『水戸黄門』の終幕の名せりふ)と迫真の演技をして実に楽しそうに笑うのだった。礼子にとっては「九州電力」が絶対的存在であるほどに大切なものであることを如実に示す言動であった。

中学3年の時、修学旅行で行った長崎が気に入って、以来盛んに「長崎礼子」に名前を変えたいと訴えていた。ある日の心理検査で、礼子が長崎礼子の名前を気に入っている様子なので検査用紙の氏名欄に「長崎礼子」と筆者が書いてみると、「うそ！冗談！」「信じられん！」と言って半ば嬉しさと驚きの混ざった声を上げるのだった。それはけっして筆者への怒りの表現ではなく、意外な出来事に対する素直な驚きであった。つまり、「長崎礼子」への改名を主張したりする彼女の一連の行動は、非現実的な行動というよりも、空想世界での遊びの領域内の行動として捉えられる性質のものであると思われた。

時折、学校での洋裁技術の習得や適応にかなりの困難さはあったが、担任と母親に、礼子の心理の理解とともに学校現場での技術援助と心理的援助を助言することによって、どうにか3年間の学校生活を送ることができた。

卒業後、しばらく在宅生活を送っていた。礼子は福祉の仕事をしたい、老人ホームで年寄りの介護をしたいと盛んに言っていた。その一方では九州電力に就職したいとも密かな空想的願望を持っていた。

就職の直前、礼子は紙に絵を描いて学校ごっこ遊びをし始めた。そこでは礼子は23歳の代用教員になり、「九」君、「州」君、「電」君、「力」君は自分の生徒になっていた(図4)。彼らは小学6年の12歳という。実は「九」君も「州」君も自分の

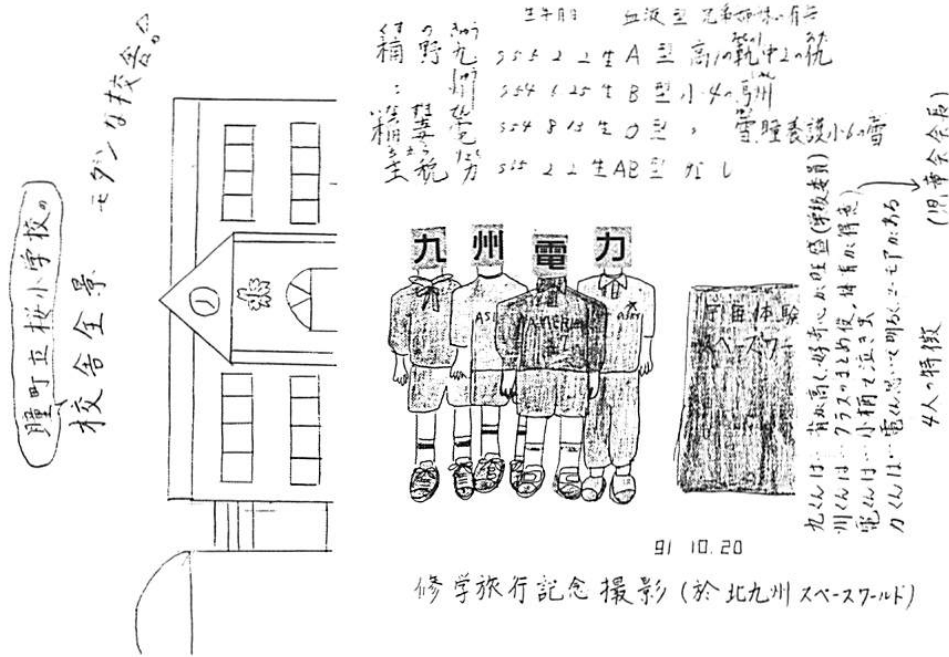


図4 修学旅行記念



図5 高校時代の級友

教え子だと語るのだった。それまでの憧れの対象から先生と生徒という師弟関係へと両者の関係は変化して、修学旅行というお別れの行事に共に参加したというのであった。

その後まもなく市の福祉課を通じて障害者を積極的に雇用している会社に就職することができ

た。以来、ほとんど問題もなくなり、働くことに積極的な姿勢を見せ、充実した毎日を送るようになった。

最近、障害者問題特集のテレビ番組に特別出演し、アナウンサーからのインタビューに答えて「卒業後、しばらく家事手伝いをして、職安の紹介で

仕事を始めたが、対人関係でむずかしく辞めて、そのあと市の福祉の世話で今の〇〇〇〇に就職して……」と自分のことをきちんと説明できるまでに成長し、職場で「九」君「州」君のことを言うとおかしいとオーナーから指摘されて以来、「九」君と「州」君の代わりに高校時代の女友達の顔写真をパネルに貼って楽しむようになった(図5)。

### III. 考 察

#### 1. 相貌的知覚について

われわれは通常、心的事象を知覚、運動、情動といった様相に分けて論じて、かつそれらが本来独立したものであるかのように考える傾向にある。しかし、幼児では知覚と純粹感情、観念と行動などの二項間が未分化で、原始的体制が支配的な心的生活の中にいることを Werner<sup>23)</sup>は明らかにした。そして彼はこのような現象は幼児のみならず、古代人や脳損傷患者らの知覚様相にも共通して認められることを示した。

幼児や古代人のように、主体と対象が運動—情動的反応によって媒介され、強く一体化されている場合には、物の把握の仕方は、静的ではなくむしろ力動的となるというのである。このような力動化によって、彼らに知覚された物は「生きている」ように見え、実際には生命のないものでさえ、ある内的な生命力を顕わにしているようにみえてくる。そこで Werner<sup>23)</sup>はこのような知覚現象を「相貌的知覚」と称している。

#### 2. 本症例にみる知覚様態の特徴

今回提示された症例は、思春期に入って「九州電力」の漢字がとても気に入る、それらの漢字が彼女には生き生きとした対象として知覚されていることを如実に示している。つまり、「九」「州」などの漢字が彼女には「相貌性」を帯びて迫り、憧れの対象「九」君と「州」君に変貌を遂げている。それらは極めて具体性を帯びたプロフィールと家系図という歴史性をもつ人物像としても描かれている。

さらに興味深いのは、対人関係の成立が非常に困難であった幼児期の最大の興味の対象であった

「漢字」という知覚対象が、思春期に至って実に鮮やかに「相貌化」をもたらしていることである。筆者は先の論文<sup>10)</sup>では、この現象を「人格化」(擬人化 personification) とみなして説明した。しかし、Werner<sup>23)</sup>はこのような現象を単純に「擬人化」とみなすことに警告を発し、それは一つの解釈にすぎないとした。つまり、相貌的知覚の方が擬人化よりもはるかに根深いもので、前者が後者に発生的に先行するものであることを強調している。厳密な意味において擬人化を語りうるためには、そこに人と人以外のものとの両極性の意識が存在しなければならないが、幼児の相貌的知覚期においてはこの両極性がまさに欠けているのであって、人と物との融合、主体と客体との融合こそこの時期の特徴であるとも彼は指摘している。

では、本症例にみられた「九」君と「州」君の現出はどのように考えればよいのであろうか。ここで注目すべきことは、漢字「九」「州」の字体が違うだけで「怒っている」「泣いている」「笑っている」などと様々な相貌性をもって彼女が漢字を知覚していることである。同じような現象がJR九州、九州石油、九州電力の各々の「九州」の文字に対しても「意地悪そう」「怒っている」「笑っていて優しい」などと同様な相貌性を持って知覚している。このような現象は、けっして彼女がこれらの漢字に人の顔という意味を擬人的に与えたからではなく、これらの漢字(図形)という対象を力動的にとらえて「相貌的」に知覚したことを意味していると捉えるべきなのであろう。つまり、この現象は漢字という対象を運動的—情動的態度でもって力動的に知覚した結果であるとみなすわけである。

「擬人化」とは、子ども特有の世界解釈のより進歩した形態とみなさなくてはならないが、自閉症児が未だ対人関係の発達に問題を持ち、人と人以外のものとの両極化に困難さをもっていることを考えると、彼らの内的世界(精神構造)も、特有の世界解釈が可能なるほどにはいまだ体制化されていないとみるのが無理のない推論であろう。

#### 3. 思春期発達における相貌的知覚とその発達精神病理学的意味

つぎに、本症例にみられた「相貌的知覚」を思春期発達との関連で考察してみたい。

礼子は小学校高学年から母への依存欲求が高まり、母子双方の間で急速に関係が深まっている。礼子が思春期に入って危機的状態を迎えたのは、洋裁専門学校に入学してからの自己意識の高まりが大いに関係していた。周囲の人とのつながりを内面では強く求めながらも実際の社会的技能がその場に不釣り合いであるために、頻繁に周囲と衝突を繰り返している。その中で礼子はとても傷つき強い自己嫌悪に陥っている。

このような危機的事態で治療関係が開始されたのだが、礼子の心理的危機を救ってくれたのは、筆者との治療関係そのものよりも、「九」君と「州」君の出会いにあることはその後の礼子と「彼ら」との関係の流れに如実に示されているとあってよい。礼子の強い対象希求が「相貌的知覚」によって「九」君と「州」君を現出させ、思春期における異性への憧憬が現実化されているのである。さらに、自分が「彼ら」とうまく関係が持てるかどうかについても真剣に考えるほどに、彼女にとって「彼ら」は絶対的な存在であったことが明らかにされている。

つぎに、実に興味深いことには、あたかも非現実的な世界に没頭しているかのような印象を与えたこの一連の行動を示しながらも、礼子は外界に対する現実志向性を一貫して持ち続けていることがその後の経過の中に示されている。母子分離が現実の問題として起こりつつあるこの時期に、現実の対人関係が困難に満ちている事態に置かれた礼子が、就寝前という自我の退行しやすい状況で、布団の周りに身の回りの物を次々に置くことによって、この時期の抑うつ不安を防衛し<sup>12,13)</sup>、「相貌的」世界に自分の内的世界を思う存分展開していたと考えることができよう。その意味では礼子の「相貌的」世界は彼女にとって現実と空想の中間領域における過渡対象としての機能を果たしていたとみなしてよいだろう。筆者が彼女のこのような「相貌的」世界を毎回のセッションで楽しみながら面接をし、大切に守ることに専念したことが彼女自身の思春期の発達危機的状況を救う役割を果たしていたことは間違いないであろう。

その後就職を直前に控え、「九」君と「州」君は憧れの存在から教師と生徒という師弟関係に変容を遂げ、礼子は少し距離をもって「彼ら」を眺めることが可能になり、就職してからは未練を残しながらも修学旅行を最後に「九」君と「州」君に別れを告げ、それに代わって現実の高校時代の級友が登場するという劇的な変化が起こっている。いかに礼子が高校時代に交友関係を強く望んでいたかを考えさせられるのだが、このようにみえると、礼子の「相貌的知覚」の世界は彼女の思春期心性を如実に反映しているということを教えてくれる。自閉症の内的世界における適応的な自我の側面<sup>9)</sup>を改めて教えられる思いがするのである。

#### 4. 相貌的知覚と自閉症の基本障害

本症例は境界域精神遅滞水準の知能を有し、言語性と動作性の知能のバランスが比較的良好な自閉症で、いわゆる高機能自閉症とみなされるものである。現在では就労して極めて望ましい良好な適応状態にある自閉症とあってよい。ではこのような知能面、適応面ともに良好な自閉症に「相貌的知覚」現象が現出したことをどのように考えたらよいのであろうか。

自閉症の言語認知障害説は、その提唱者である Rutter<sup>10)</sup>自身でさえその根拠に疑問を投げかけ、今日では社会性の障害である「自閉性」と言語発達の障害とはある程度独立して生じると考えられるようになった<sup>19)</sup>。その結果、再び自閉症における「自閉性」が脚光を浴びることになった<sup>21)</sup>。

筆者はこれまでに、自閉症の言語障害像を標準失語症検査を用いて分析することによって、彼らの言語障害は厳密な意味での言語認知障害と考えるより、もっと基本的な対人認知障害を基盤にもっていると推定し<sup>9)</sup>、成人期に達した高機能自閉症で極めて良好な言語発達を遂げた症例でも、その運動技能や社会的技能を分析してみると、いまだ主体-客体の関係の病理が強く残存していることを示し<sup>11)</sup>、従来の言語認知障害仮説の再検討の必要性を主張してきた。

先に述べたように、「相貌的知覚」は幼児や古代人のような、知覚と純粹感情、観念と行動などの



二項間が未分化で、原始的体制が支配的な心的生活の中にいる人々に特徴的に現出する現象である。すなわち、人と物との融合、主体と客体との融合した時期に特徴的な知覚様相である<sup>23)</sup>。

今回明らかにされた「相貌的知覚」現象の存在は、自閉症の基本障害を考える際に重要な問題を提起していると考えられるのである。人間の生誕以後の精神発達の中で、知覚機能の成熟は、社会性の発達は言うに及ばず、認知、言語発達などあらゆる発達領域にわたって極めて重大な役割を果たしていることを考えると、比較的良好な発達経過をたどったと思われる高機能自閉症において、「相貌的知覚」が容易に現出するという事態は、彼らの自我構造がいまだ自他の未分化な、主体と客体が融合した状態を呈しやすという側面をもっていることを示す証左といえよう。

ただここでもう一つ注目しなくてはならないのは、自他の未分化な主体と客体の融合した側面があったにしろ、礼子の人格構造そのものはそれなりのまとまりを保ち、比較的良好な現実生活が送られていることである。このように一貫して現実志向性を保ち続けてきた礼子の社会性の発達は、その人格構造の多層性を考慮に入れて初めて理解できるのではなかろうか。

Stern<sup>20)</sup>は、それまでの精神分析における人格発達理論に対して自己感 sense of self の発達という新しい視点を提唱している。それによると、人間は生誕直後から自己感を持っているとし、最初に新生自己感が、その後中核自己感、主観的自己感、さらには言語自己感が重層的に生成しながら人格発達は展開されるという。そして各々の自己感は一生涯ならぬかの形で永続的に脈々と生きつづけるというのである。

相貌的知覚は自己感の中でも新生自己感が生成し発達していく過程において極めて優勢な知覚様相であることを考えると、自閉症にみられる「相貌的知覚」そのものが異常な現象なのではなく、新生自己感の後に重層的に展開していく種々の自己感の発展過程そのものの構造的な問題であると考えなくてはならないだろう。したがって精神病理学的観点からみた自閉症の基本障害は、人格構造の成長発達過程そのものを探究していくなかで初

めて明らかになっていくものではないだろうか。

今日までに明らかにされてきた自閉症研究の中の諸知見と照らし合わせて考えると、自閉症にみられる「相貌的知覚」は、単に彼らの人格構造の特徴を考える手掛かりを与えるのみならず、神経生理学、神経心理学、精神病理学などの次元で明らかになっている様々な知見の相互関連性を解きあかす可能性をも秘めた現象として今後さらに詳細な検討を必要とする重要な課題といえるだろう。

本論を考える際に、多くの示唆をいただいた鯨岡峻氏（島根大学教育学部教授）に心よりお礼申し上げます。

最後に本症例の治療の機会を与えていただいた鶴見台病院（別府市）山本紘世院長にお礼申し上げます。

#### 文 献

- 1) American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual III Revised Edition, APA, Washington, D.C., 1987.
- 2) Bemporad, J.R.: Adult recollections of a formerly autistic children. *J. Autism. Dev. Disord.*, 9; 179, 1979.
- 3) Bemporad, J.R., Ratey, J.J. and O'Driscoll, G.: Autism and emotion: An ethological theory. *Am. J. Orthopsychiatry*, 57; 477, 1987.
- 4) Courchesne, E., Akshoomoff, N.A. and Townsend, J.: Recent advances in autism. In: (eds.), H. Naruse and E.M. Ornitz. *Neurobiology of infantile autism. Excerpta Medica, Amsterdam*, p.111-128, 1992.
- 5) Dalferth, M.: How and what autistic children see? *Acta. Paedopsychiat.*, 52; 121, 1989.
- 6) Hermelin, B. and O'Connor, N.: Psychological experiments with autistic children. Oxford, Pergamon Press, 1970. (平井久, 佐藤加津子訳: 自閉児の知覚. 岩崎学術出版, 東京, 1977.)
- 7) Hobson, R.P.: Beyond cognition: A theory of autism. In: (ed.), G. Dawson. *Autism: Nature, diagnosis and treatment*, Guilford Press, New York, p. 22-48, 1989.
- 8) 小林隆児: 言語障害像からみた年長自閉症児者に関する精神病理学的考察. *児精医誌*, 23; 235, 1982.

- 9) 小林隆児：働く自閉症者の生活様式の特徴. 精神科治療学, 1; 205, 1986.
- 10) 小林隆児：青年期自閉症の精神性的発達について. 児精医誌, 32; 205, 1991.
- 11) 小林隆児, 岡村克巳：成人期自閉症の運動技能と社会的技能における基本障害. 発達の心理学と医学, 1; 367, 1990.
- 12) 小林隆児, 皿田洋子：強迫現象とその回復過程からみた前思春期発達. 児精医誌, 33; 1992.
- 13) 小林隆児, 牛島定信：ある女性アイドル歌手の自殺を契機に抑うつ状態を呈した11歳の女児の1例. 精神科治療学, 4; 1295, 1989.
- 14) 鯨岡峻：心理の現象学. 世界書院, 東京, 1986.
- 15) 黒丸正四郎, 岡田幸夫：行動科学からみた「自閉症状」. 台 弘, 井上英二編：分裂病の生物学的研究. 東京大学出版会, 東京, p. 85-100, 1973.
- 16) 中根晃：自閉症, その科学的理解. こころの科学, 37; 20, 1991.
- 17) Ornitz, E.M.: Autism at the interface between sensory and information processing. In: (ed.), G. Dawson, Autism: Nature, diagnosis and treatment, Guilford Press, New York, p.174-207, 1989.
- 18) Rutter, M.: Cognitive deficits in the pathogenesis of autism. J. Child. Psychol. Psychiat., 24; 513, 1983.
- 19) Shah, A. and Wing, L.: Cognitive impairments affecting social behavior in autism. In: (ed.), E. Schopler and G.B. Mesibov. Social behavior in autism. Plenum, New York, p.153-169, 1986.
- 20) Stern, D.: The interpersonal world of the infant. Basic Book, New York, 1985. (小此木啓吾, 丸田俊彦監訳. 神庭靖子, 神庭重信訳: 乳児の対人世界 理論編, 臨床編. 岩崎学術出版, 東京, 1989, 1991.)
- 21) 杉山登志郎：自閉症の内的世界. 精神医学, 34; 570, 1992.
- 22) Volkmar, F.R. and Cohen, D.J.: The experience of infantile autism: A first-person account by Tony W. J. Autism. Dev. Disord., 15; 47, 1985.
- 23) Werner, H.: Comparative psychology of mental development. International University Press, New York, 1948. (鯨岡峻, 浜田寿美男訳: 発達心理学入門. ミネルヴァ書房, 京都, 1976.)
- 24) World Health Organization: International Classification of Diseases. 10th Edition, WHO, Geneva, 1992.